

埋蔵文化財緊急調査事業に係る
埋蔵文化財調査報告

平成11年度増山城跡総合調査概報

増山城跡 III

2000年3月

砺波市教育委員会

序 文

増山城跡の歴史は、南北朝の時代から近世の初めに至る約250年に及び、砺波地方の歴史と深く関わりを持っています。特に戦国時代に突入すると、神保氏と越後長尾・上杉氏、上杉氏と織田氏、佐々氏と前田氏など、越中領有を目指す様々な勢力が攻めぎあう最前線となっていました。

また、増山城跡は県内有数の規模を誇るものとして知られており、「越中三大山城」の一つとして数えられています。この時代の山城跡で、往時の状態を良好な形で保存されているところは、県内でも数少ないといわれており、城跡は昭和40年に富山県指定史跡に、城下町跡の土塁は昭和56年に砺波市指定史跡に指定されています。

この増山城跡に本格的な調査の手が入ったのは、昭和60年代前半に砺波郷土資料館が実施した増山城跡調査事業です。この調査により、二重に巡る空堀をはじめ、櫓台や郭跡など、従来考えられた以上の大規模な縄張りであることなどが判明しました。

この調査は踏査を中心に実施しており、埋蔵文化財に関する調査が実施し得なかった点などに課題が残っていました。そのため、史跡構造の解明を目的とした増山城跡総合調査事業を、国や富山県の補助を受け、平成9年度から4ヵ年計画で実施することとしました。3ヵ年目となる本年度については、城跡北部に位置し、まわりに空堀と土塁を巡らす仮称「池ノ平等屋敷」の発掘調査を実施し、その概要を概報として作成しました。

この小冊子は、まだまだ内容としては不十分ですが、発掘調査によって得られた数少ない資料を紹介し、文化財を通じて先人の文化を理解・伝承するとともに、地域の歴史と文化の活用にいくばくかのお役に立てば幸いです。

おわりに、調査の実施に多大なご協力をいただきました増山城跡総合調査委員会や地元増山地区、富山県埋蔵文化財センターなど、関係の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

砺波市教育委員会

教育長 飯 田 敏 雄

例　　言

1 本書は、富山県砺波市増山地内に所在する増山城跡の埋蔵文化財調査概要である。

2 事業は、緊急発掘調査事業によって実施した。

3 調査期間・面積は次のとおり。

発掘調査期間 平成11年9月27日～平成11年12月24日

発掘面積 350m²

測量調査対象面積 110,000m²

4 調査体制は以下のとおり。

増山城跡総合調査委員会	国際日本文化研究センター	教 授	宇野隆夫
	日本考古学協会会員		西井龍儀
	富山県埋蔵文化財センター	所 長	岸本雅敏
	富山県教育委員会文化課	課 長	林 清文
	富山大学人文学部	教 授	前川 要
	富山県文化財保護審議会	会 長	佐伯安一
城郭研究家			高岡 徹
	梅檀野地区増山自治振興会		十田昌春
	砺波市教育委員会	教育長	飯田敏雄
	砺波郷土資料館	館 長	新藤正夫
調査担当者	砺波市教育委員会	生涯学習課	学芸員 利波匡裕
調査事務局	砺波市教育委員会	教育次長	井上辰夫
	同	生涯学習課	課 長 老松邦雄
	同	生涯学習課	係 長 川原国昭(平成11年9月30日まで)
	同	生涯学習課	係 長 小西清之(平成11年10月1日から)

なお、現地の清掃・作業員については、増山地区自治会(西村毅会長)、増山城跡整備委員会(宮野秀一委員長)、砺波市シルバー人材センターより協力を得た。測量調査については㈱上智に委託した。

5 資料の整理については、利波、高木美奈子、阿部米、荒木慎也、表原孝好、床平慎介、鳶川貴祥が行った。本書の編集と執筆は、西井龍儀、高岡徹の指導を受け、利波が行った。

6 調査期間中および資料整理期間中、次の方々から御教示・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。(敬称略、五十音順)

尾田武雄、久々忠義、西村毅、宮田進一、宮野秀一

7 調査において次の地権者の方々に御理解・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。(敬称略、五十音順)

石田孝之、西方憲一、田中克典、土倉鉄男、宮野秀雄、安カ川仁省

8 本書の挿図の表示については、方位は真北、水平水準は海拔高である。

9 本文中の郭などの表記については「増山城跡調査報告書」〔砺波市教育委員会・砺波郷土資料館 1991〕に準拠する。

10 出上品および記録資料は砺波市教育委員会で保管している。

11 発掘調査・整理参加者は次のとおりである。

高木美奈子(砺波市教育委員会)、大野秋一、荒木久平、石田孝之、井田四郎、島田一朗、高島一子、田中忠治、西村昌藏、信田正明、安カ川礼子、山崎信雄、山本正枝(以上砺波市シルバー人材センター)、阿部米、荒木慎也、表原孝好、田中洋一、床平慎介、鳶川貴祥(以上富山大学考古学研究室)

目 次

序 文

例 言

目 次

I 遺跡の立地と歴史的環境	1
II 調査に至る経緯	1
III 調査の経過と方法	4
1.調査の経過	4
2.座標軸の設定	4
IV 調査の概要	5
1.概況	5
2.造構	5
3.遺物	8
V まとめ	19
引用・参考文献	23
写真図版	24

図表

第1図 周辺の遺跡分布図	第9図 集石群平面・断面図
第2図 平成11年度調査範囲図	第10図 北虎口エレベーション
第3図 トレンチ位置図	第11図 出土遺物1
第4図 トレンチ平面・断面図1(T1-A~C,P7)	第12図 出土遺物2
第5図 トレンチ平面・断面図2(T2-Δ~D,P1~6)	第13図 出土遺物3
第6図 トレンチ平面・断面図3(T3~5)	第14図 郭造成面と遺物出土レベル
第7図 トレンチ平面・断面図4(T6~9)	第15図 遺物出土状況
第8図 トレンチ平面・断面図5(T10~13)	
第1表 周辺の遺跡一覧	

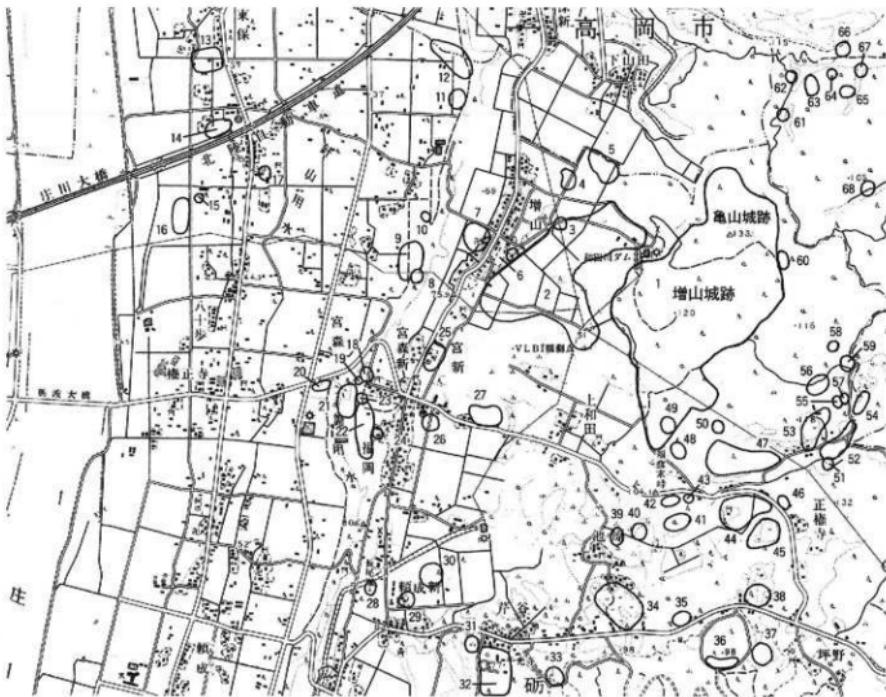
I 遺跡の立地と歴史的環境

増山城跡は砺波市の東部、婦中町との境に近い庄東山地の丘陵上に位置する。芹谷野段丘と庄東山地の間には和田川が複雑に蛇行し、地質基盤である青井谷泥岩層を抉り込み、深い谷を形成している。その谷をせき止めて和田川ダムが築かれ、ダム東側の急崖の上に増山城跡が立地している。ダム湖水面下および増山城跡と西側に対峙した丘陵上には、文献資料・圃場整備時の試掘調査から、城下町の存在が知られている。城下町が確認された増山遺跡は、圃場整備事業の関係から試掘調査が昭和52年に行われており、縄文・古代の遺物、中世末～近世初頭の遺物・遺構が検出された。城跡周辺には旧石器時代から近世に至るまで多くの遺跡の存在が知られているが、旧石器時代の遺跡では芹谷遺跡が代表的で、ナイフ型石器や槍先型尖頭器などが出土している。巣照寺遺跡は縄文時代中期の遺跡であり、昭和51年の発掘調査では11棟の堅穴住居跡と多くの縄文土器や石器類が出土している。当遺跡から出土した土器は、巣照寺Ⅰ～Ⅲ式に分類され、縄文時代中期前半の標準土器となっている。増山城跡近傍には、増山团子地窯跡をはじめ増山外貝喰山窯跡、小丸山1・2号窯跡、増山赤坂窯跡、増山笛山窯跡、正権寺後島窯跡など、8世紀後半から10世紀代半ばまでの須恵器窯跡・炭焼窯跡が多数確認されているが、これらの窯跡群は芹谷野段丘沿いに比定されている東大寺領莊園の井山、伊加流伎、石栗の各荘との関連が考えられる。芹谷野丘陵上には能景塚・為景塚と呼ばれている塚が存在する。能景塚は永正3年(1506)に増山城を攻めた長尾能景が般若野で敗死したことにより造ったとされる。長尾為景は永正12年(1515)以降幾たびも越中へ進攻しており、没年は天文11年(久保1996)という説が有力視されていることから、為景を祀っている塚としての断定はできない(河合1965)。

II 調査に至る経緯

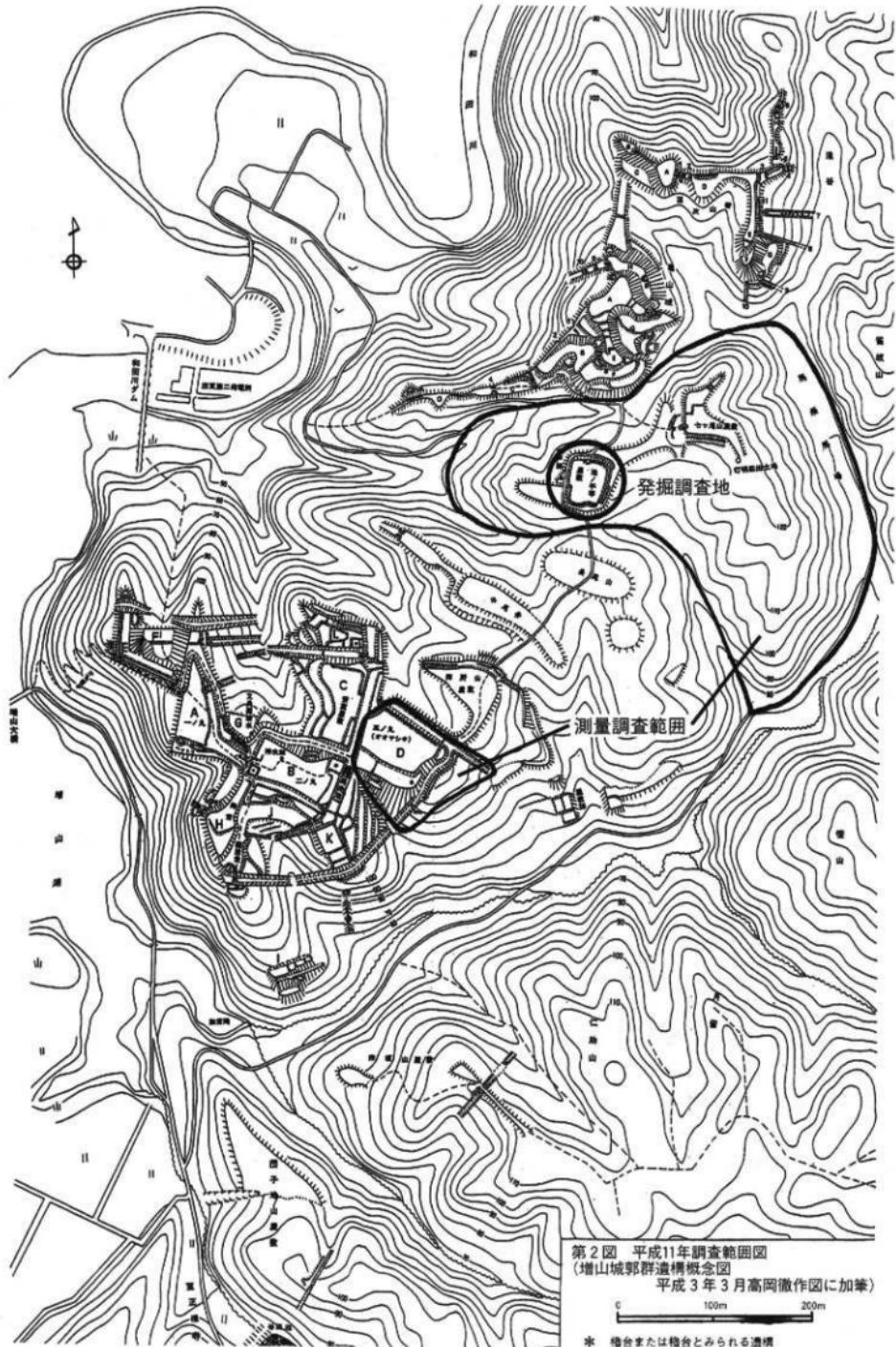
増山城跡の本格的な調査については、高岡徹氏、西井龍儀氏を中心として砺波郷土資料館が昭和62年から約3年間にわたって実施されている。この調査では、城郭・文献・考古の三分野の研究者による調査グループが結成され、作業が進められた。調査の結果、増山城自体の繩張りが初年度には判明し、二重の空堀や櫓台、長大な堅堀、郭跡など数々の成果があげられた。その成果をふまえ、昭和63年11月には増山城跡を中心として「北陸地方中世城館セミナー」が開催されている。

これまでの調査では、増山城跡の現地形観察が行われていたが、より明確に増山城跡の実態を把握するため考古学的な調査が必要であることが生まれていた。これを受け、砺波市では平成9年度に増山城跡総合調査委員会を設立し、増山城跡の実態を解明するとともに、重要な文化遺産を周知・活用する方法を検討することとなった。砺波市教育委員会は、増山城跡総合調査委員会の指導を受けながら平成9年度から4ヵ年の計画で増山城跡を調査することとし、これまで平成9・10年度の2ヵ年の調査を実施している。過去2ヵ年の調査は、城跡南部を中心として発掘・測量調査を実施した。その結果、平成9年度では無常東下郭を中心とした部分において、複数回にわたる大規模な造成工事が実施されていること、外側空堀を人為的に埋めていること、空堀内部に階段が確



第1図 周辺の遺跡付分図 (S = 1/25000)

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	増山城跡	山城	中世	35	朝成A遺跡	散布地	绳文
2	増山遺跡	散布地・集落	縄・古・中・近	36	朝成B遺跡	散布地	绳文
3	増山田原跡	墳	奈良	37	朝成D遺跡	散布地	旧石器?
4	高沢鳥足遺跡	散布地・集落	古代	38	朝成E遺跡	散布地	縄・平・中
5	高沢鳥足1・II遺跡	散布地・集落	財・唐・古・近	39	城	城	中世?
6	増山妙覺寺坂遺跡	塚	奈良	40	低座遺跡	散布地	绳文
7	増山西瀬跡	散布地	古代?	41	須新末津瀬跡	製鉄	古代
8	呂森塚跡	塚	奈良	42	須新末津八遺跡	散布地	近・朱・古
9	呂森神社	寺院	鎌倉・室町	43	池原向島遺跡	製鉄	古代
10	行者塚	塚	中世?	44	正福寺遺跡	散布地	平安
11	東保石坂南遺跡	散布地	古代	45	正福寺南遺跡	散布地	平安
12	東保石坂北遺跡	散布地	縄・奈・魏	46	正福寺前山遺跡	散布地	中世?
13	館の土崩跡	破壊	中世	47	金ヶ里山遺跡	製鉄	古代
14	東保高瀬跡	散布地	平安・鎌倉	48	金ヶ里山西瀬跡	製鉄	古代
15	東保校若堂遺跡	寺院	中世?	49	増山圓子地遺跡	塚	奈良
16	高坪遺跡	散布地	平・鎌・室	50	増山安坂遺跡	塚	平安
17	東保高瀬南遺跡	散布地	古代?	51	正福寺後島遺跡	塚	平安
18	宮森新井1遺跡	集落	绳文	52	正福寺後島塚跡	散布地・風落	平安
19	光明真言塚	孫屋?	中世?	53	増山十村山遺跡	散布地・風落	绳文・古代
20	宮森遺跡	散布地	绳文	54	小丸山窓跡群	窓	平安
21	大谷鳥足跡	散布地	縄・奈・早	55	増山外貝塚山塚跡	窓	奈良・平安
22	觀照寺遺跡	集落	绳文	56	増山燒山遺跡	製鉄	古代
23	宮森新野塚	孫屋	中世?	57	増山外貝塚山遺跡	散布地	旧石器?
24	觀照寺境内遺跡	墓?	鎌倉	58	増山後山窓跡	窓・製鉄	平安
25	宮森遺跡	散布地	奈良	59	増山外法度山窓跡	窓	平安
26	葛森大池塚跡	湖	奈良	60	増山後山窓跡	製鉄	古代?
27	上和田塚跡	散布地	绳文	61	西谷No.9遺跡	段築?	古代?
28	長尾爲魚塚	塚	中世?	62	西谷No.7遺跡	段築?	古代?
29	貴尾能長塚	塚	中世?	63	西谷No.8遺跡	段築?	古代?
30	鶴成土遺跡	散布地	绳文	64	西谷No.5遺跡	段築?	古代?
31	芦谷下大塚跡	散布地	中世・近世	65	西谷No.6遺跡	段築?	古代?
32	芦光寺遺跡	寺院	中世	66	西谷No.4遺跡	段築?	古代?
33	芦谷塚跡	散布地	田・縄・古	67	西谷塚跡	塚	平安
34	池原塚跡	散布地・集落	田・縄・古	68	西谷No.10遺跡	段築?	古代?



第2図 平成11年調査範囲図
(増山城郭群遺構概観図
平成3年3月高岡徹作図に加筆)

0 100m 200m

水 橋台または橋台とみられる遺構

認されたことなど多くの成果が得られた。また平成10年度には、B郭東南部域において、K郭で人為的に埋められた空堀が検出されたこと、B郭南側空堀および馬洗池から厚い焦土の堆積が確認されたこと、複数回にわたる大規模な造成工事が実施されていること、大胆な構造プランの変更を実施していることなどの成果を得ることができた。平成11年度調査については、「池ノ平等屋敷」で発掘調査を実施し、測量調査はD郭周辺の城郭中心部、「池ノ平等屋敷」および「七ツ尾山城跡」周辺の城域北東部で行った(第2図)。「池ノ平等屋敷」は通称であるが、その平坦面の広がりから建物の検出が期待できること、土界・空堀が周囲を巡り独立した郭として成立していることによる性格付けおよび用途を明確にすることなどを目的として発掘調査の対象とした。増山城跡内には当時の水源と考えられる箇所がいくつかあり、そのひとつとされる井戸が郭西側に存在することも郭を考えるうえで重要である。井戸は径2m、深さ3mを測り、素掘りである。「梅檀野誌」(土田彦一(古香)著、大正3年刊)には、上杉謙信の攻めによる増山城落城の折、神保氏の夫人・政子が、宝剣、機密文書を抱いて井戸に入水したとの伝承が伝えられている。また測量調査については、城郭中心部の圓化を早めて今後の調査に備えるためにD郭周辺、併せて「池ノ平等屋敷」および「七ツ尾山城跡」周辺を測量調査対象範囲とした。

III 調査の経過と方法

1. 調査の経過

発掘の事前に、発掘調査対象区およびその周辺の下草刈りを実施し、また堆積物の除去作業も行い、地形の変化が分かり易いように努めた。その後、幅約1~2mでトレンチを設定し、最終的には計13ヶ所の掘削を行った。トレンチについては、平坦面や堀に直交するとともに、断面図にて各所のエレベーションを確認できるように設定した。掘り下げは地表面までを基準とし、現地は機械の進入が困難であるため人力にて掘削を行った。また、立木の伐採は基本的に行わないこととし、トレンチ内においても立木を残している部分がある。

調査にあたり、平成9年度より増山城跡総合調査委員会を組織し、調査方法・調査地点などについて検討する機関としている。調査前には今年度の調査対象区の選定と具体的な調査方法を検討し、調査期間中においては現地にて遺構・遺物の検出状況を確認しつつその時点での発掘の成果や今後の調査について検討を行った。調査後には、調査の結果報告および今後の調査について確認した。

調査終了後の後の埋め戻しは人力にて行った。斜面では崩落を防ぐため、土のう袋を積み上げることによって斜面を復元している。

2. 座標軸の設定

座標軸は増山城跡から亀山城、孫次山砦などを視野に入れ、国土地理院設定第VII座標系のうちX=72.5km、Y=-11.5kmの点を0原点として設定した。南北軸をX軸とし、X=0から北方へX座標の数値が増える。同様に東西軸はY軸とし、Y=0から東方向へ進むにつれて、Y座標の数値が増える。1グリッドの区画は10×10mとし、今年度の調査区の範囲はX=400~500, Y=680~680, Y=300~380, 340~580である。「池ノ平等屋敷」周辺については、発掘調査用として別に小グリッドを設定した。1グリッドの区画は2×2mである(第3図)。今年度の測量調査対象面積は110,000m²で、発掘面積は350m²である。

IV 調査の概要

1. 概況

調査対象地区は増山城跡の北東側、標高約117mの山地中に所在する。北側には谷を挟んで亀山城跡があり、東には尾根続きに七ツ尾山、南部には谷を挟んで長尾山がある。西側は和田川からの谷が大きく入り込んで二又にわかれて、その分かれた谷に挟まれるように尾根があり郭が配置されている。一帯の現況は、杉や雜木などの森林となっており、杉は戦後の植林による。地元の方によれば、増山城跡における比較的高位の平坦面は、戦後までは畑として利用されていたそうであるが、「池ノ平等屋敷」も例外ではなくサツマイモの栽培が行われていたそうである。

「池ノ平等屋敷」は北辺約35m、南辺約25m、西辺約50mの長さがあり、南東側が少しぇぐれているが、ほぼ台形状を呈する。面積は約1,500m²で、平坦面の標高は約117m、土壘の最高点は118.57mを測る。郭の西側を通る遊歩道は、南部の増山城跡から北部の亀山城跡へと至る。空堀は郭の北側中央部から東側を巡り南東部虎口(出入口)まで続く。郭の南側には平坦面が存在する。土壘は北部中央の虎口から東側へ巡り、南東部の虎口で一旦途切れるが南側を通って西側南部まで至る。西側は南部から約8m程度残存しているのみである。残る西側および北西部において、土壘は確認されない。土壘は北東部と南西部に高まりを見せ、他は比較的低位である。表面観察から北部、南東部、西部の3ヶ所の虎口が存在しており、西部虎口については郭内へクランク状の道が通じている。

2. 造構(第4~10図)

(1) 郭平坦面(T1-A・B,T2-A~C,T3,T4,T9,T10,T11)

郭平坦面において、当初は北虎口から南北に継断するトレンチ(T1)と郭の中央部を東西に横切るトレンチ(T2)を設定し、のち東側にT3・T4を設定した。

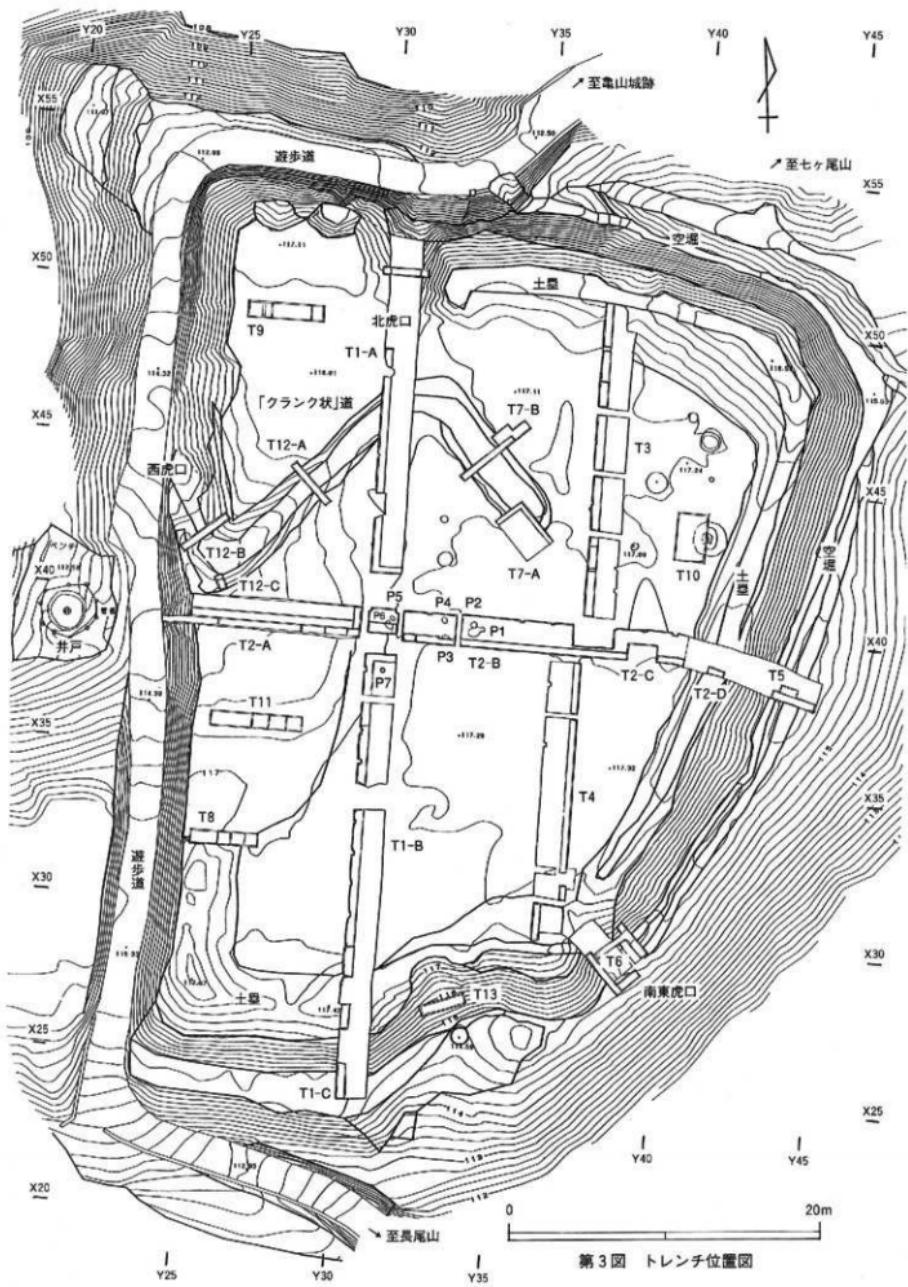
郭西部中央城では地表面が傾斜しており、西方に向かって約80cmレベルを下げている。この部分は、盛土による造成面であり、少なくとも2回の造成が実施されていることを断面観察および出土土器から確認した。盛土は等高線の傾斜で判断すると延約15mの範囲に広がっていると思われ、最深部では地表面下2mにも達する。もともと西側から谷が入り込んだところであり、凹みを解消し平坦面を拡大するための造成と考えられる。

平坦面の中央部X=39~41,Y=31~35の範囲内においてピットを7ヶ所検出している。

P1 長軸150cm、短軸54cmを測り、不定形のピット。最深部は深さ30cm。覆土は黄褐色土で炭化物および焼土が混入する。覆土上面から中世土器(第13図25)が出土している。

P2 径45cmの円形を呈するが、内部は径22cm、深さ42cmで一段深く掘り込んでいる。覆土は黄褐色土で炭化物および焼土が混入する。覆土の上面では塊となった焼土が確認された。P1と隣接する。柱穴と考えられる。

P3 径50cmの円形で、深さは8cmを測る。覆土は黄褐色土で炭化物および焼土が混入する。焼土は覆土上面で塊として存在する。



第3図 トレンチ位置図

P 4 径30cmの円形で深さは16cm。覆土は黄褐色土で炭化物および焼土が混入するが、焼土は塊がある。

P 5 長軸45cmの不定形。深さは6cm。覆土は黄褐色土で炭化物および焼土が混入する。

P 6 径30cmの円形で、深さ50cmを測る。覆土は暗黄褐色土で多量の炭化物および焼土が混入する。柱穴と考えられる。

P 7 円形で径28cm、深さ30cm。覆土は黄褐色土で炭化物および焼土が混入する。柱穴か。

T 1・T 2ではX=38~43,Y=24~37の範囲で、またT 4ではX=32~39,Y=38の範囲において焼土と炭化物が混在した層が確認され、遺物が多量に出土した。遺物の集中している地域は、ピットの集中域と重なっている。

T 4 南部のX=32,Y=35~36では、集石群を確認した。1m×0.8mの楕円形を呈する範囲に広がっており、周辺では焼成不良の須恵器蓋(第1図3~6)、坏底部(第1図8)や中世土師器(第14図64)が出土した。集石群については石を取り外したが、ピット・被熱痕などは確認されなかった。

(2)土壘(T 1-B,T 2-C,D,T 3,T 4,T 8,T 9,T 11)

土壘上面は標高約117.4~約118.5mを測る。北東部・南西部にやや高まりがあり、北東部が最も高く118.57mで南西部は117.87mである。土壘上面と平垣面との比高差は約20cm~約100cmを測る。幅は約2~6mである。各トレンチにおいて盛土が確認されており、地山層を整形した後に盛土し土壘を造成している。北側は北虎口東壁から始まり、土壘端部は約2mあまり郭内部へ折れている。このことから土壘と虎口は同時期の造成が考えられる。西側土壘については南部から8m程度残存しているのみである。T 8の断面観察から途中で削平されているが、T 11から土壘の痕跡が検出されないことから、もともとT 11まで至らない長さであったと推定される。T 9からも土壘の痕跡はみられない。

(3)空堀(T 5)

地表面から約30cm下で底面に至り、標高は約115.4mを測る。底面から東側土壘までは約2.4mの比高差をもつ。底面は箱状を呈しており、堀幅は約5m、堀底幅は約1mである。空堀は地山を掘り込んで造成している。地表面における空堀内部の標高は、北東部が最も高く115.53mを測り、北側空堀西端部へは約1.4m、東側空堀南端部へは約40cm下る。北部の空堀端部は遊歩道造成時に削られているので詳細は不明であるが、東南側については虎口の登り口で止まっている。

(4)虎口(T 1-A,T 6,T 12-A~C,T 13)

「池ノ平等屋敷」では、表面観察から3ヶ所の虎口が確認されている。北虎口はN-8°-Eで北に正面を向け、入り口幅約4m、上り口の傾斜角度は約15~20°を測る。虎口北側の東側は土壘、西側上面は平坦面によって構えている。出入り口については、後世の遊歩道による造成を受けているので当時の様相は明らかではない。しかし虎口下端と北側空堀底部の断面観察より、標高約113.6m付近から斜面を登っていたと推定される。南東虎口はS-46°-Eの方向に正面を向いている。地表面観察から土橋状の虎口に至る土橋の存在が確認された。実際のトレーンチ発掘により地山成形された

土橋が検出され、全長約5m、幅約3mを測り、土橋の道幅は約80cmである。斜度は登り始めが約20°、登るにつれて角度が増えて最大斜度約30°となる。土橋を登り切った郭の入り口は低い土塁によって挟まれている。東側空堀は土橋によって止まっており、空堀を掘ると同時に土橋を成形していると考えられる。土橋裾の空堀内部からは炭化物を含む層が検出され、また中世土師器が出土している(第13図50、第14図63・66・69)。土橋の南側についても空堀の存在を推測していたが、空堀は確認されなかった。西虎口はN-21°-Wに入り口を向けており、虎口幅が約4mで緩やかに登っている。郭中央西部域については盛土による造成が顕著な範囲であるが、T12-A~Cの断面観察から西虎口はその盛土を掘削して造成している。向かって東側は削って斜面とし、西側は5m程度土塁状にして入り口を形成する。西虎口はクランク状道に連続している点に注目される。また、郭南東部のえぐれている付近においても虎口の存在を想定しT13を設定したが、虎口は確認されなかった。

(5) クランク状道(T 7-A・B,T12-A~C)

クランク状道は、西虎口を出入り口として郭の内部へとつながっている。各トレンチの観察から、郭造成時の盛土を削り、道を造り出していることを確認した。西虎口付近では幅約4mで、郭平坦面との最大高低差は約80cmであるが、北虎口付近では幅約3m、深さ約25cmとなる。出入り口からはN-159°-Sの方向で郭へ入り緩やかに約8m進む。69°北方へ振って傾斜角約10°で約6m、ほぼ平坦で約5m連続し、さらに96°南方へ振りほぼ平坦で約6m続く。道の最奥部は緩やかに立ち上がりしている。T 7-A・Bでは、中世土師器を確認した(第13図26・29・35・37・38)。

(6) 郭南部平坦面(T 1-C)

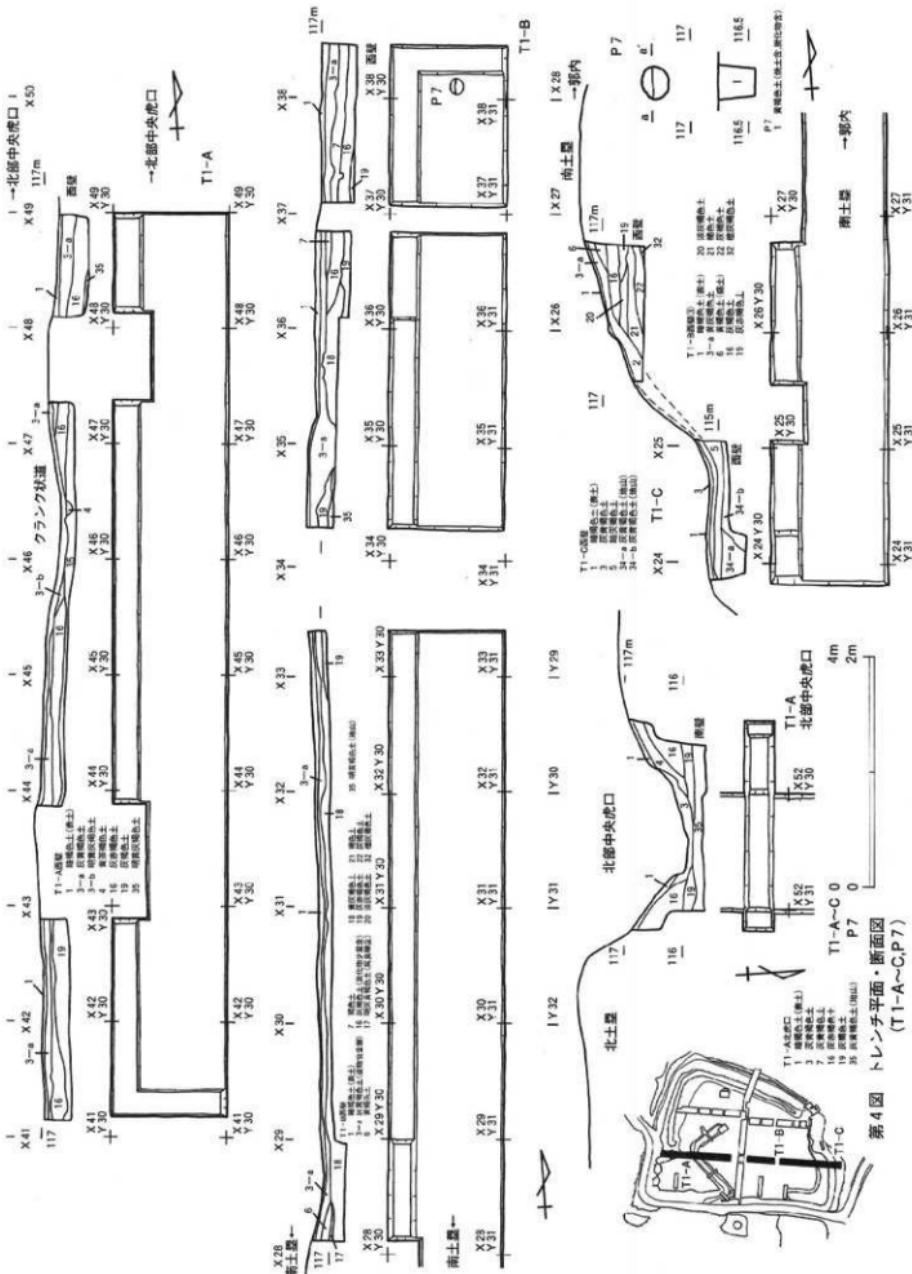
郭南部では空堀の検出を推定しT 1-Cを設定したが、空堀は存在せず平坦面であることを確認している。平坦面の標高は約114.8mで、幅約2mを測る。遊歩道で一部削平を受けているが、南部約1.6m下位にはもう一段平坦面が存在しており、郭南部は平坦面が段状に造成されていることになる。また、トレンチ内からは須恵器壺底部が1点出土した(第1図7)。

(7) 崖み(T10)

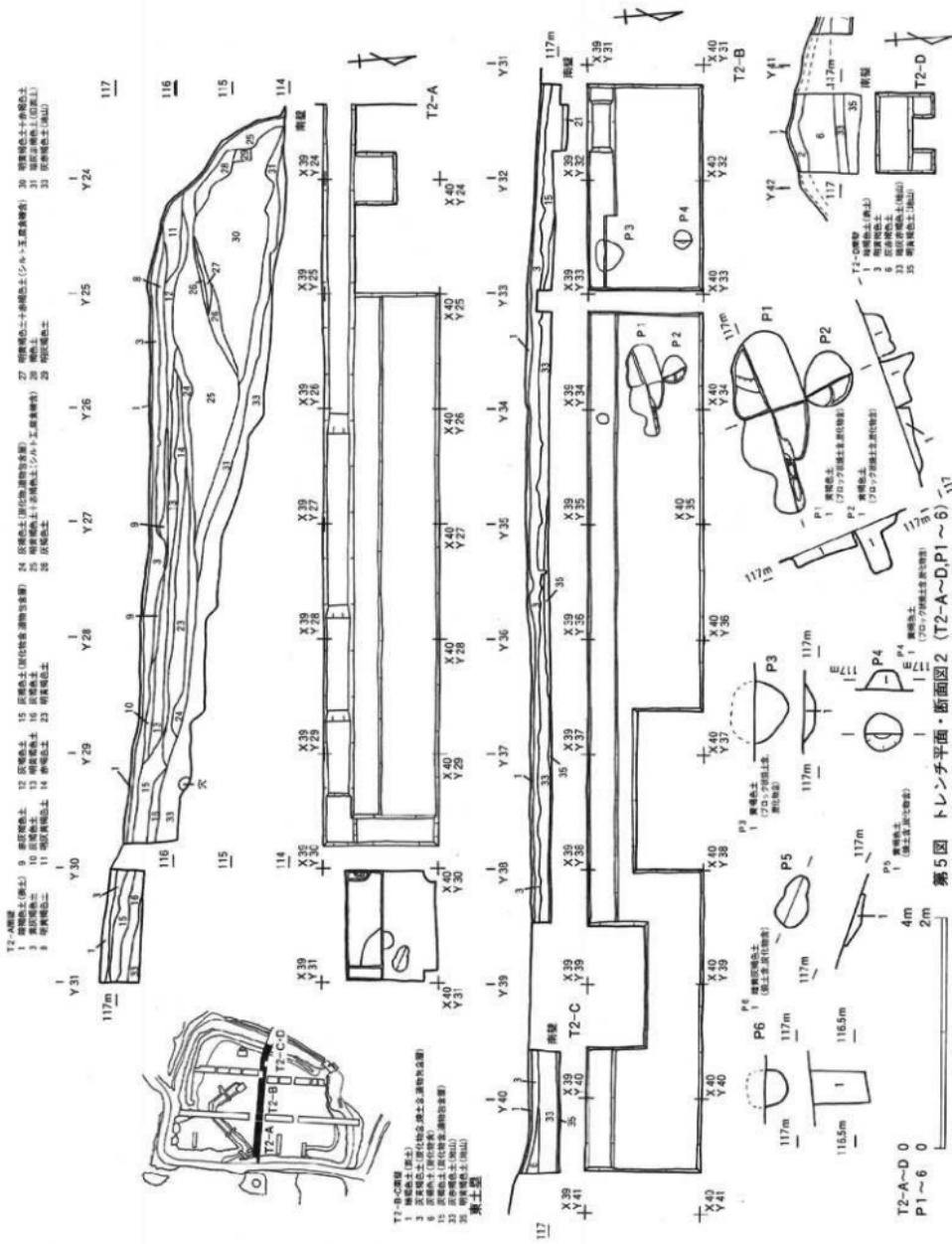
郭平坦面では直径1~2m程度の崖みが3ヶ所確認されており、その崖みが明瞭でないものも数えると10ヶ所程度になる。なかでも最大のものについて半分を断ち割って断面観察を行った。調査位置はX=42~44,Y=50~52の範囲。崖みは盛上層を掘り下げて造られており、地表面下約30cmで炭化物の層が確認されている。遺物は確認されていない。

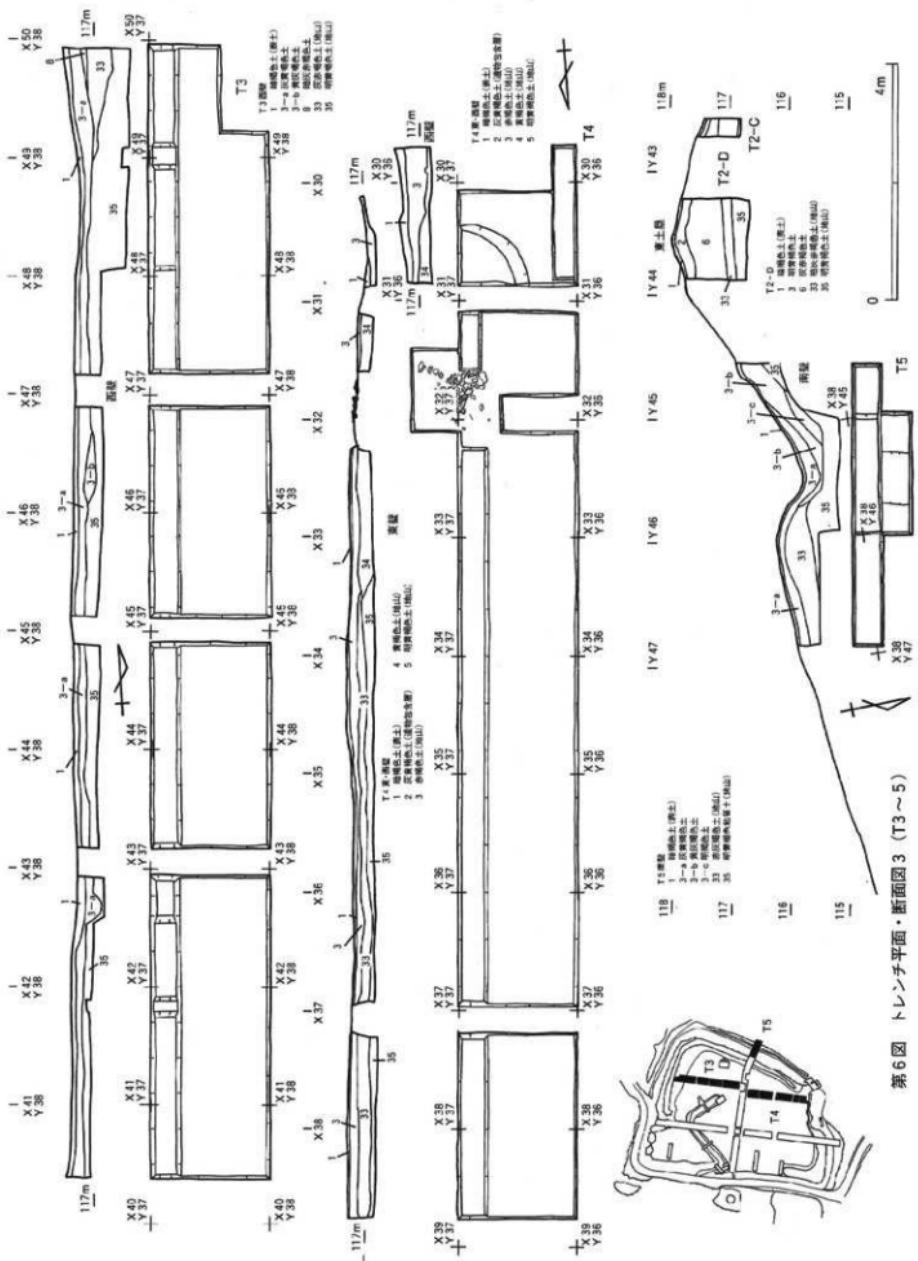
3. 遺物

今回の調査区からは総数217点遺物が出土し、縄文土器、須恵器、中世土師器、瀬戸美濃、石器、その他の各遺物が確認された(第11~13図)。遺物の総数は217点であり、うちの84%を中世土師器が占める。

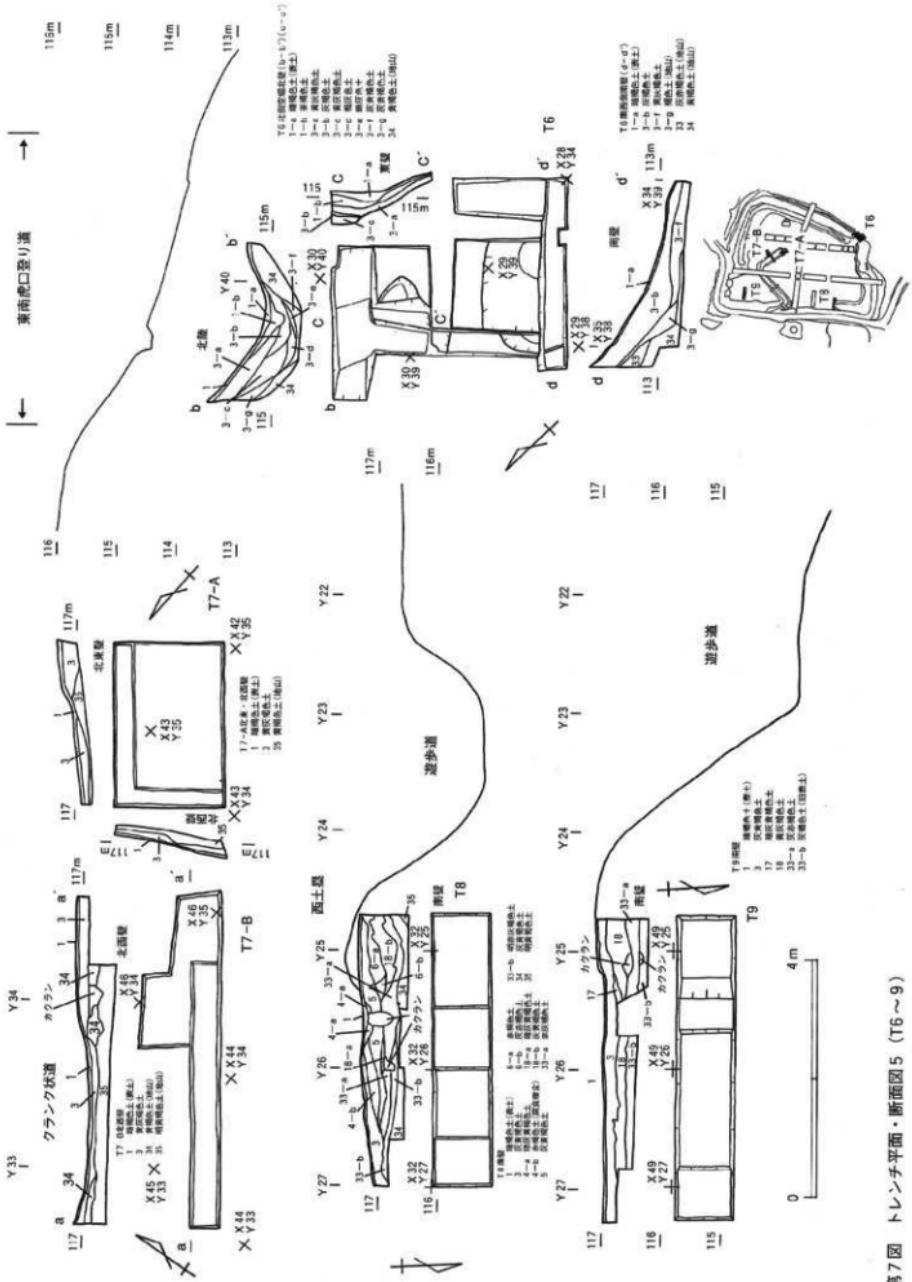


シテ平面・断面図
(T1-A~C87)

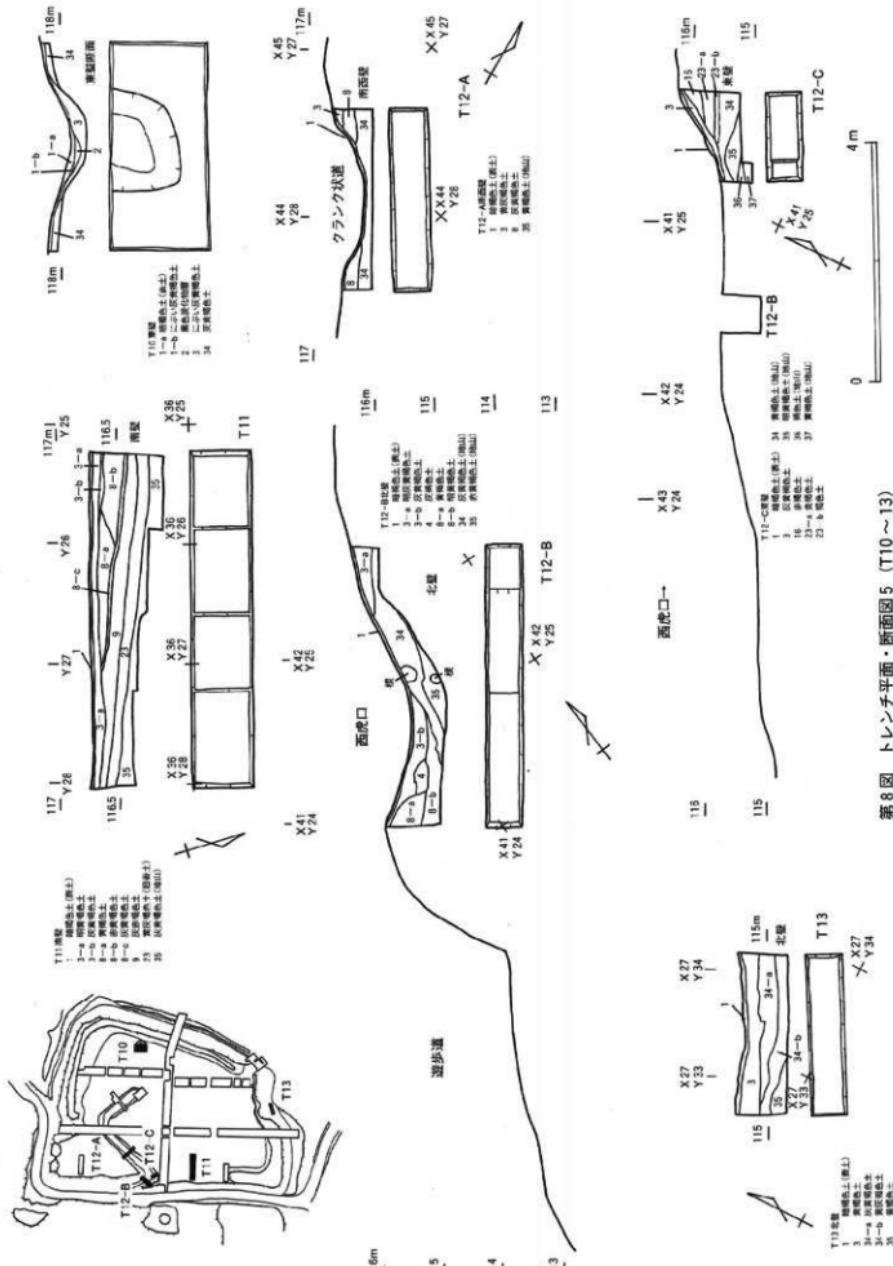




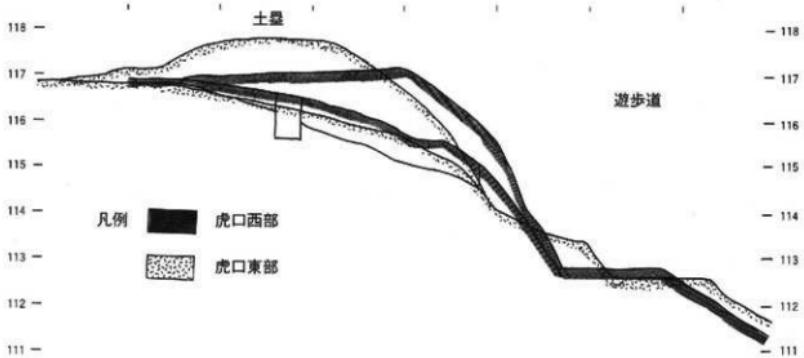
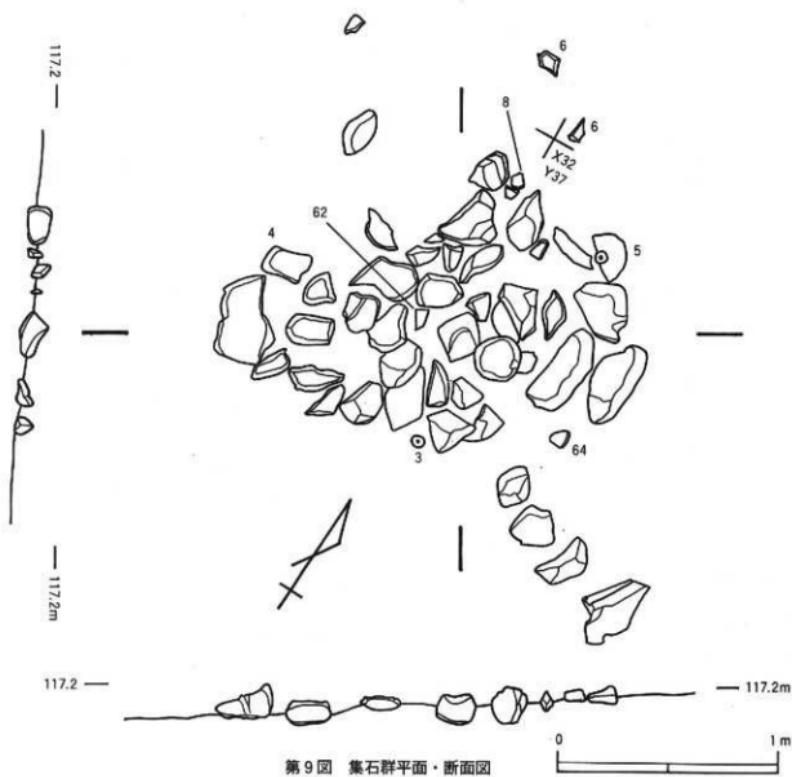
第6図 テレンチ平面・断面図3 (T3～5)



第7図 トレンチ平面・断面図5 (T6~9)



第4図 トレーンチ平面・断面図5 (T10~13)



第10図 北虎口エレベーション

縄文土器(1・2)

1は表面に縄文の痕跡がわずかに残る。2は施文が確認されない。どちらも表面の摩滅が著しい。
須恵器(3~10)

3~6は蓋。3は扁平なつまみのみが残る。4~6は天井部がほぼ水平にめぐり直線的に傾斜する。端部は下方へ折れ下がる。径は12cm。5は径12cmで天井部がほぼ水平にめぐり丸みをもって傾斜する。口縁部付近でも水平にめぐり下方へ折れ下がる。4~5はいずれも不良品。7は壊A。8は壊Bで、底部からやや丸みをもって立ち上がる。9は壊か。10は壊脇部。内面にはあて具痕の同心円文がみられる。天井部や口縁部端部の形態から8世紀後半から9世紀初頭のものと思われる。7はT1-C、そのほかはT4集石群周辺から出土。

中世土師器(15~80)

中世土師器は最も出土量が多く、全体量の84%を占める。口縁端部の形態から7類に分類した。口縁部片は68点を数える。そのうち60点を口径9~10cm、11~12cm、13~15cmで大別し、それぞれ65%、30%、5%の割合で確認した。また、口縁部付近や体部内外面に煤が付着しているものも確認できる。

1類は端部が鋭角的なもの(15~19)

15~17・19は直線的に体部が外反する。18の体部はやや緩やかに立ち上がる。

2類は端部にやや丸みを帯びるもの(20~25)

21・22は内外面ともに煤が残る。21は体部が緩やかに内湾して立ち上がり、25はわずかに体部が外反する。

3類は端部が三角形状のもの(26~43)

26は内面をナデ調整し面を作る。口縁部内面には煤が残る。27は外面をナデ調整し面を作る。28・29・31・35・36は内側が緩く外反し、外側は直線的に端部に至る。37~43は底部から体部に至ると若干厚みを増し、38・41は先端が尖る。43は内外面ともに煤が付着する。

4類は端部が外反するもの(44~53)

44・46・52は外面のナデで外反を強調する。47・48・51はナデで端部を調整し、47は口縁端部の外反が顕著。

5類は端部が内湾するもの(54~56)

54は内面にナデを施し、面を作る。55・56は薄手の上器で一旦外反し、端部がわずかに内湾する。

6類は端部が立ち上がるもの(57~72)

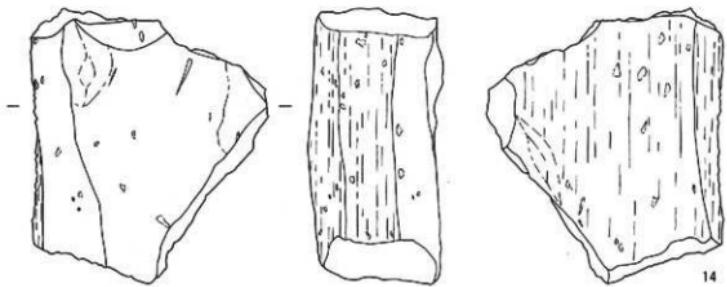
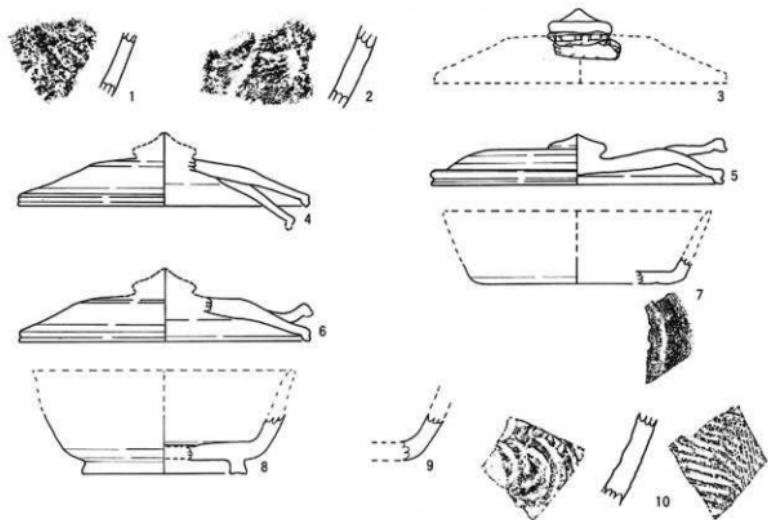
57は口縁がわずかに外反し端部が立ち上がる。58は体部が直線的に外傾し端部が立ち上がる。内外面に煤が付着する。59は口縁が大きく外反し端部が立ち上がる。口縁部付近には煤が付着する。60~72は口縁端部をつまみあげる。71・72は体部の肥厚が著しく、また71はほぼ完形で出土している。

7類は内湾するもの(73)

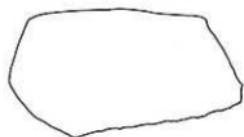
73は口径8cmで、外面に煤の付着が顕著である。

その他の中世土師器(74~80)

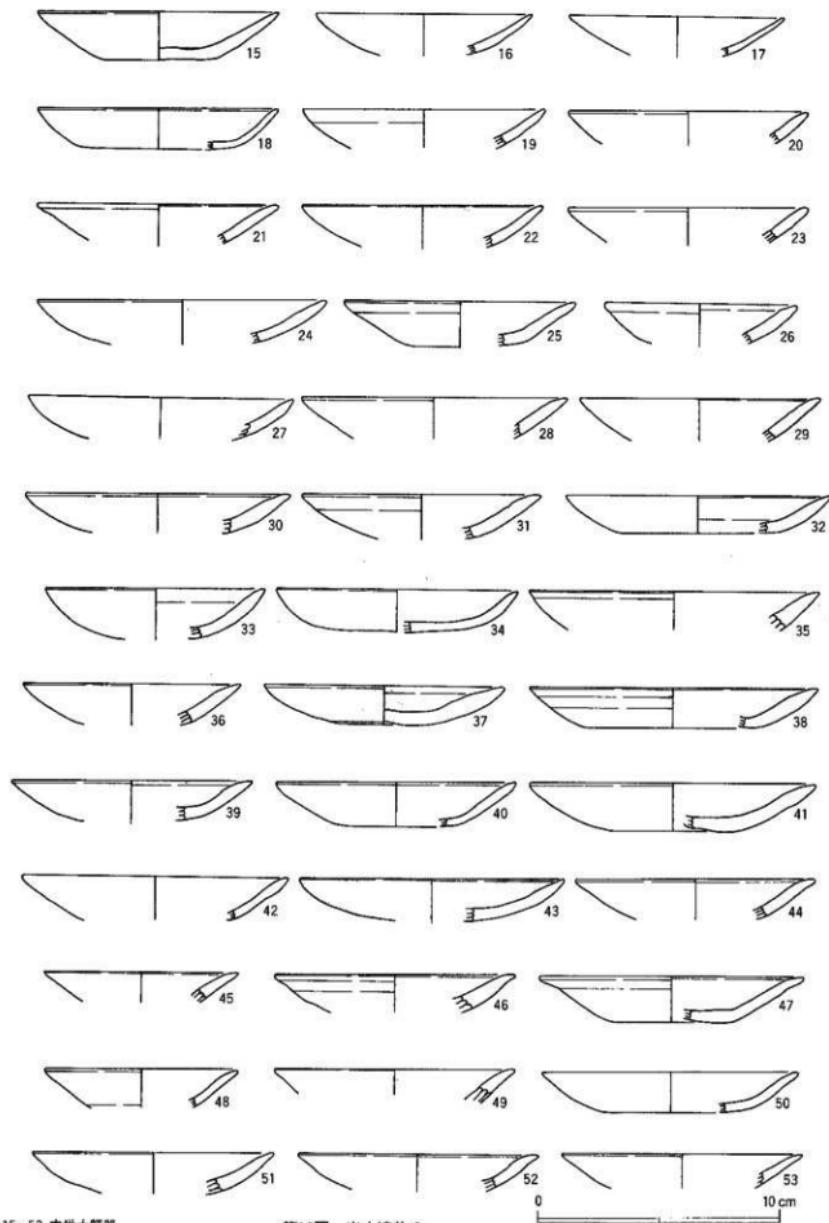
74~78は体部の薄いもの。74の口径は9cmであり、78は底部と考えられる。79・80は底部。



1.2. 繩文土器 3～6. 須恵器蓋
7～9. 須恵器杯 10. 須恵器
11～13. 刺片 14. すり石

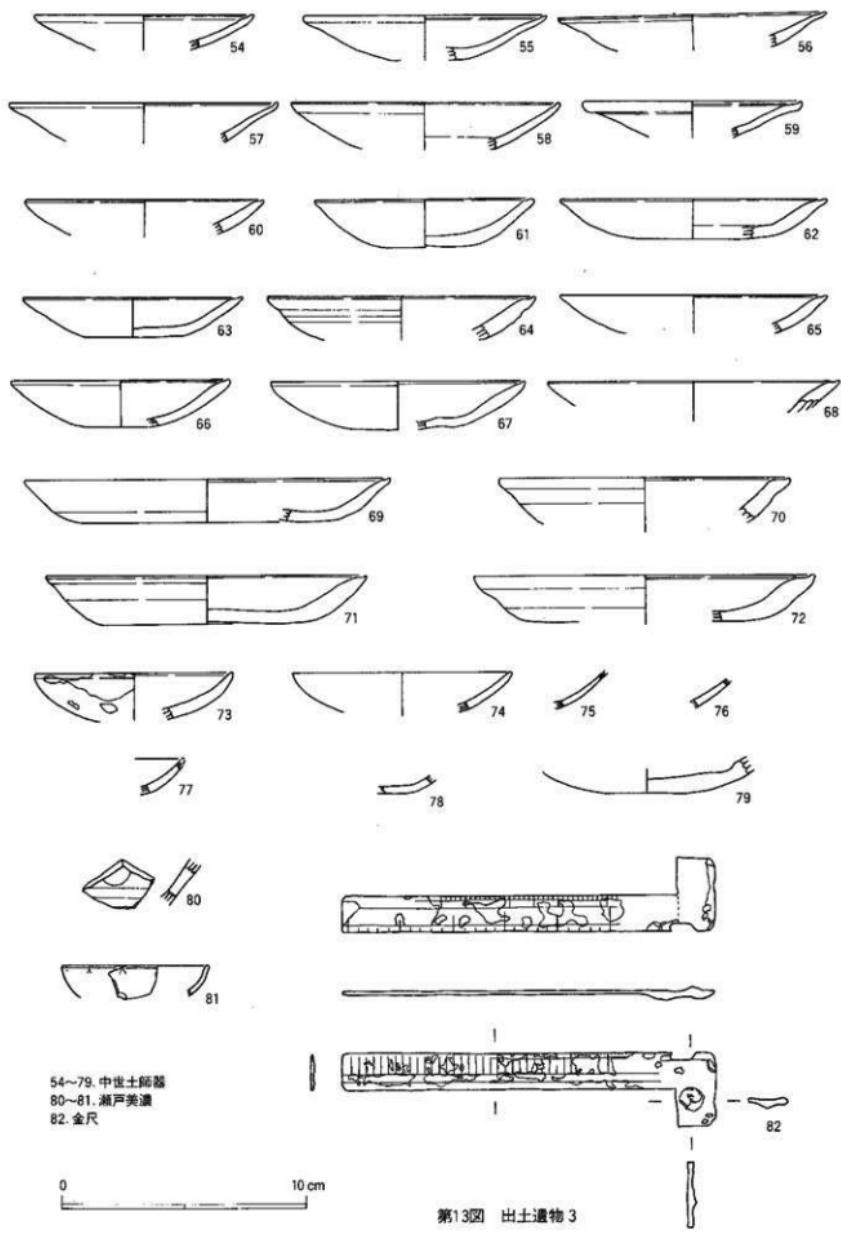


第11図 出土遺物 1



15~53. 中世土器

第12図 出土遺物 2



第13図 出土遺物 3

中世土師器の年代について位置付けると、23のように端部の丸みを帯びるものは16世紀前半から中頃で弓庄城C地区 SD1002出土土器〔上市町教育委員会1985〕に類例がある。71・72のように体部が肥厚し口縁端部のつまみあげが確認されるものは、魚津市丸塚〔魚津市教育委員会1986〕などに類例があり16世紀中頃から後半。38・41のように端部が尖るものは16世紀後半から末と考えられる。このように「池ノ平等屋敷」出土の中世土師器については、少なくとも16世紀前半から16世紀末までの時期が存在し、いわゆる増山城跡の存続時期と並行している。

瀬戸美濃(81・82)

81は天目茶碗。茶褐色の胴部に鉄釉がかかる。82は口縁に花弁状となるふくらみをもつ小鉢。16世紀中頃か。

石器(11~14)

11~13は剥片。11・12は頁岩、13は安山岩。14はすり石か。縄文時代と考える。

その他の遺物(83)

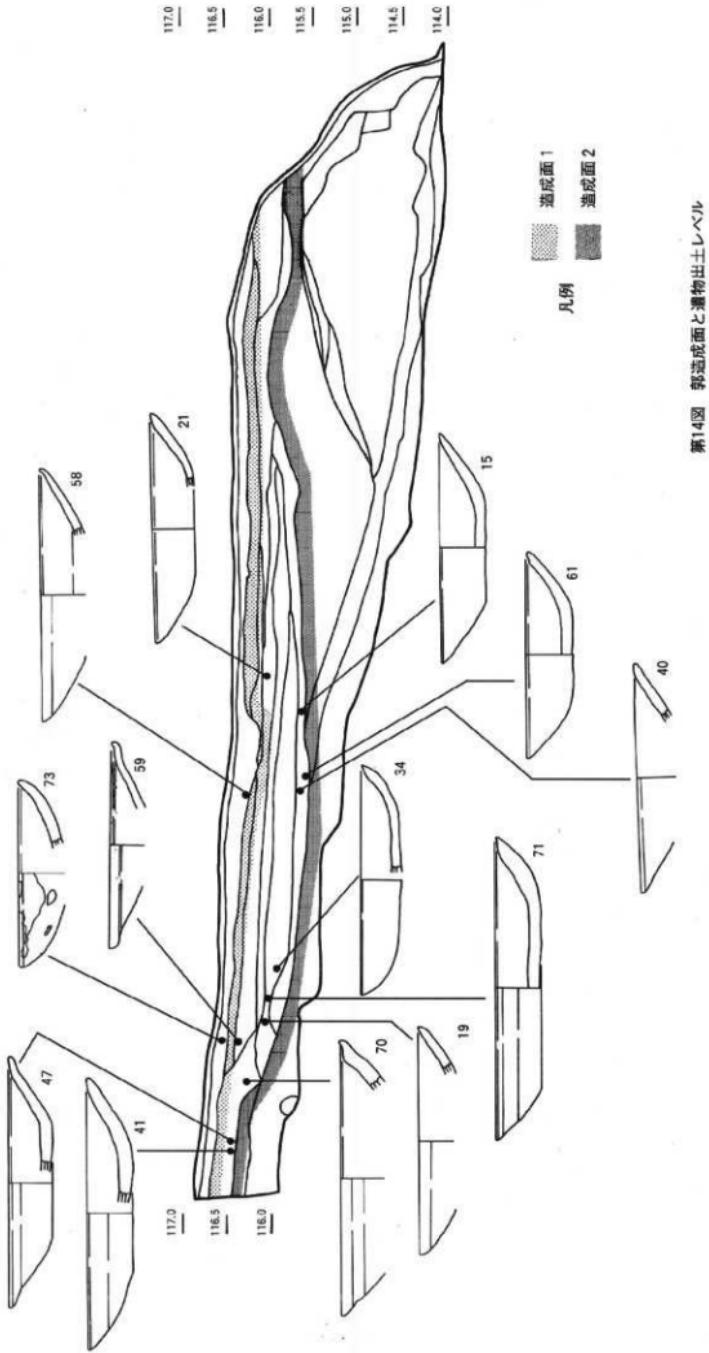
83は金尺。全長15.7cm、幅1.6cm、一方の端が1.6cm直角に曲がる。表面は錫びが激しいが、1cm間隔、2.2cm間隔、3cm間隔の目盛りが刻まれている。T11表土層から出土。近現代の遺物。

V まとめ

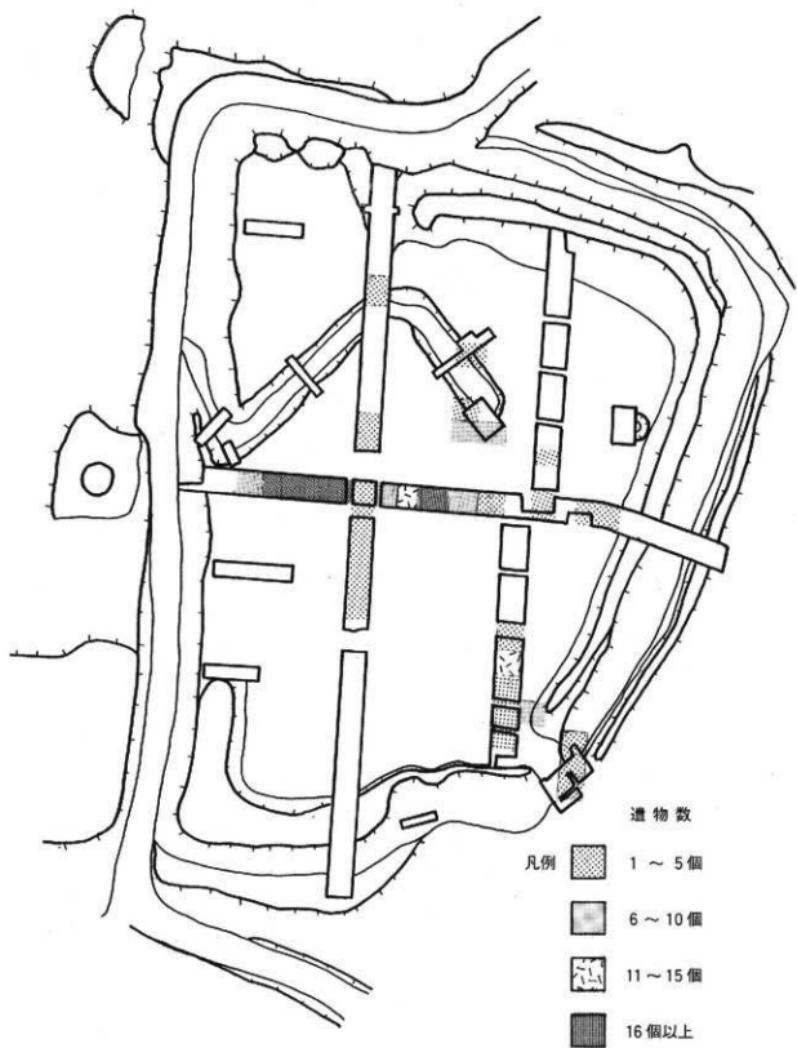
平成11年度は「池ノ平等屋敷」を中心とした地域を調査対象範囲としている。「池ノ平等屋敷」はその地表面観察からも「屋敷」的な要素をもった郭と考えられていた。それは郭を巡る空堀・土塁をもつこと、長尾山や中尾骨といったような地城と比較すると大きく手が加えられていることなどがその理由である。その一方で、亀山城跡及び増山城跡との関係、使用目的など不明な点も多くあげられている。

調査では、縄文土器、須恵器が検出されたが、これにより縄文時代や古代にも当地周辺が使用されていたことを物語っている。増山城跡が所在している増山周辺や福山周辺の地域では、8世紀後半から10世紀頃迄、連続と須恵器生産が続いており、不良品の出土は、現在の城跡内付近でも窯が存在したことを示唆している。城跡の成果としては、増山城中心部と遜色なく造工事を実施していることがあげられる。元来緩やかな平垣面の丘陵頂部を空堀・土塁で区画し、さらに谷筋が入り込み自然の窪みが存在するところについては盛土によって平坦面を造りあげている。この平坦面はT2-A断面から判断すると少なくとも2度の造成が実施されている(第14図)。出土遺物から時期を推測すると、一度日の造成は16世紀前半から中頃、二度目の造成は16世紀後半から終末と考えられる。また、郭造成には一旦整地しており、その上から盛土造成している。

「池ノ平等屋敷」出土の中世土師器の年代は、これまでの調査から考えられる増山城跡の存続時期と並行している。平成10年度調査ではK郭周辺について空堀・郭の変遷を考え、K郭地表面下から確認された空堀やB郭周辺の空堀が最初に造られた時期が16世紀初頭から16世紀後半、再度空堀を付け替えて現在存在する2重の空堀とした時期が16世紀末頃と、2度の大規模造成を想定している。



第14図 井造成面と遺物出土レベル



第15図 遺物出土状況

今回の「池ノ平等屋敷」における中世土師器および郭造成面と照合すると、ほぼ同時期の結果が導き出されることから、増山城築造当初より城郭群内における広範囲の基本的な城郭構築プランが行なわれたと考えられる。

郭中央部やや西よりではピットが集中しており、柱穴と考えられるものも検出されている。狭い調査範囲でのピットの検出なので建築物の存在を確定付けることは困難であるが、P 2・P 6・P 7から径30~40cm余りの柱穴をもった小規模な建物を推定している。建物の性格を判断することは難しいが、「城の下草」(宮永正運著)の「増山城」文中に、「城の北東の続山に、家臣屋敷跡也とて、所々其跡あり。」、「池の平等」周辺で屋敷が存在した可能性を示しているものといえる。また、屋敷の存在は井戸、清水を必要としたと考えられる。「越中遊覧志」(竹中邦香著)には、「所々に古井あり。」「加能越三州地理稿」(加賀藩)には「本丸に清水あり、其の他古井跡多し。」とあり、城内各所に水源が存在したことをおわせている。

北虎口、南東虎口、西虎口の計3ヶ所の虎口が確認されていることについては、郭の出入りと関連する。北虎は、西側は郭北西隅の平坦面、東側は土壘に挟まれて存在している。土壘は北虎口で約2m内側へ折れているので、北虎口と十星は同時期に造られたと考えられ、郭成立当初からの出入り口と思われる。また郭北西隅については遊歩道で削平を受けているが、現時点の見通しでも1mあまり虎口東側よりも北へ張り出している。このことから北虎口では、北東方面からの道があり北西隅の張り出しで90°南方へ曲がって郭内部に入るといった造りをしていると推測される。東方からの道については北側空堀の底部が北虎口の下端付近とほぼ同レベルと考えられるので、空堀内部が北虎口への道であった可能性がある。南東虎口については土橋の成立が東側空堀と関連して造られていることから、北虎口と同様に郭成立当初から出入り口として存在していたのであろう。南東虎口へのルートとしては、南方に位置する増山城中心部からの道が連絡していたと思われ、郭の南東部のえぐれにより東へ方向を変え土橋を通じて郭内部へ入るのである。北東からの連絡も可能であるが、その際には空堀内部ではなく空堀東側の上面を歩かせたのであろう。西虎口については、郭造成時の盛土を掘って造成している。また連続するクランク状道も同様であるから、少なくとも北虎口、南東虎口よりも後に造られていると判断できる。

クランク状道の用途は、①西側の井戸への連絡路、②郭内部に存在するものを意識した出入りの道路、③後世の木材などの搬出路などが考えられる。

しかし、いずれも明確となる裏付けはなく、断面観察から少なくとも郭造成以後に道が造られていることは明らかである。

集石群については石を外したが何も確認されなかつたので、畠として「池ノ平等屋敷」が利用されていた際の石捨て場だったのではないだろうか。須恵器は集石群周辺に散在していたが、いずれも不良品であり実用品とは成り得ない。

遺物の出土状況については、T 2-A・Bのピット集中区と平坦面傾斜部分、T 4の南半部分に出土が集中している(第15図)。遺物の集中範囲とピット集中区が重なる理由については、建物などが存在し、郭の中心部としての機能を果たしていたことが考えられる。T 4の南半部分については遺物出土状況と郭内における性格付けは困難であるが、南東虎口から上りきった場所であり、また郭内でも比較的高位にあたるので建物が存在した可能性もある。

さて、「池ノ平等屋敷」は空堀・土塁などの施設を備えており小規模な建物が存在していたと考えられることから、亀山城・孫次山と谷を挟んで相対する丘陵上の防御施設の一部と考えられる。また、出土土器からは城郭群中心部と同時期に造られ、城の存続期間には継続して利用されていることがわかる。これにより、増山城に築城当初から北東部の防御を意識して造った施設といえるだろう。当地については、高岡氏の論考より「池ノ平等屋敷」という呼称を使用しているが、調査の成果から「屋敷」という名称は否定できない。また、「池ノ平等屋敷」と亀山城の関連性についても不明確な点が多く、今後のさらなる調査検討が必要となろう。

〈引用・参考文献〉

- 魚津市教育委員会1986『富山県魚津市本江地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
上市町教育委員会1984『弓庄城跡第4次緊急発掘調査概要』
上市町教育委員会1985『弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要』
河合久則1965「増山城をめぐって」『砺波市史』砺波市史編纂委員会編
久保尚文1996「長尾為景と越中戦国史」再論『富山史壇』第119号
砺波市1990『砺波市史資料編1考古、古代・中世』
砺波市教育委員会1978『富山県砺波市梅禮野遺跡群予備調査概要』
砺波市教育委員会1998『増山城跡I』
砺波市教育委員会1999『増山城跡II』
砺波市教育委員会・砺波郷土資料館1991『増山城跡調査報告書』
氷見市教育委員会1993『県指定史跡阿尾城跡』
北陸中世土器研究会編1997『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』



1



2



3



4



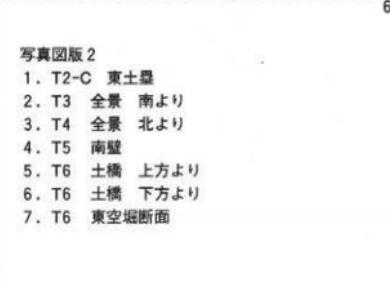
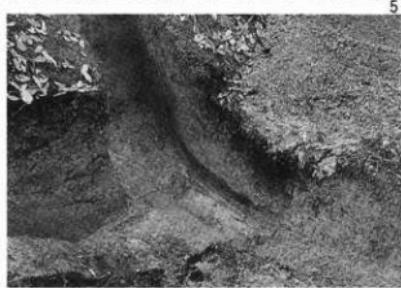
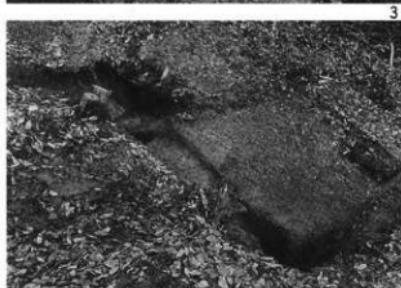
5



6

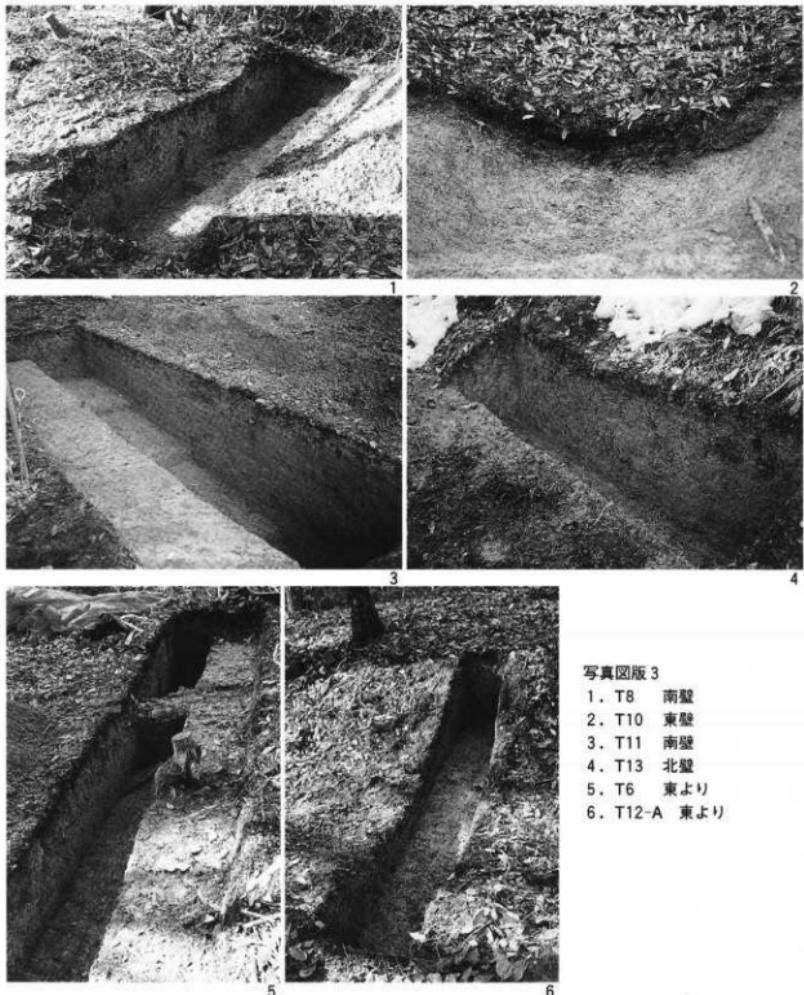
写真図版 1

1. T1-B 北方向より
2. T1-B 南土壁西壁
3. T1-A 北虎口東壁
4. T1-A 北虎口西壁
5. T2-A 東より
6. T2-A 西より



写真図版 2

1. T2-C 東土壠
2. T3 全景 南より
3. T4 全景 北より
4. T5 南壁
5. T6 土橋 上方より
6. T6 土橋 下方より
7. T6 東空堀断面



写真図版 3

1. T8 南壁
2. T10 東壁
3. T11 南壁
4. T13 北壁
5. T6 東より
6. T12-A 東より

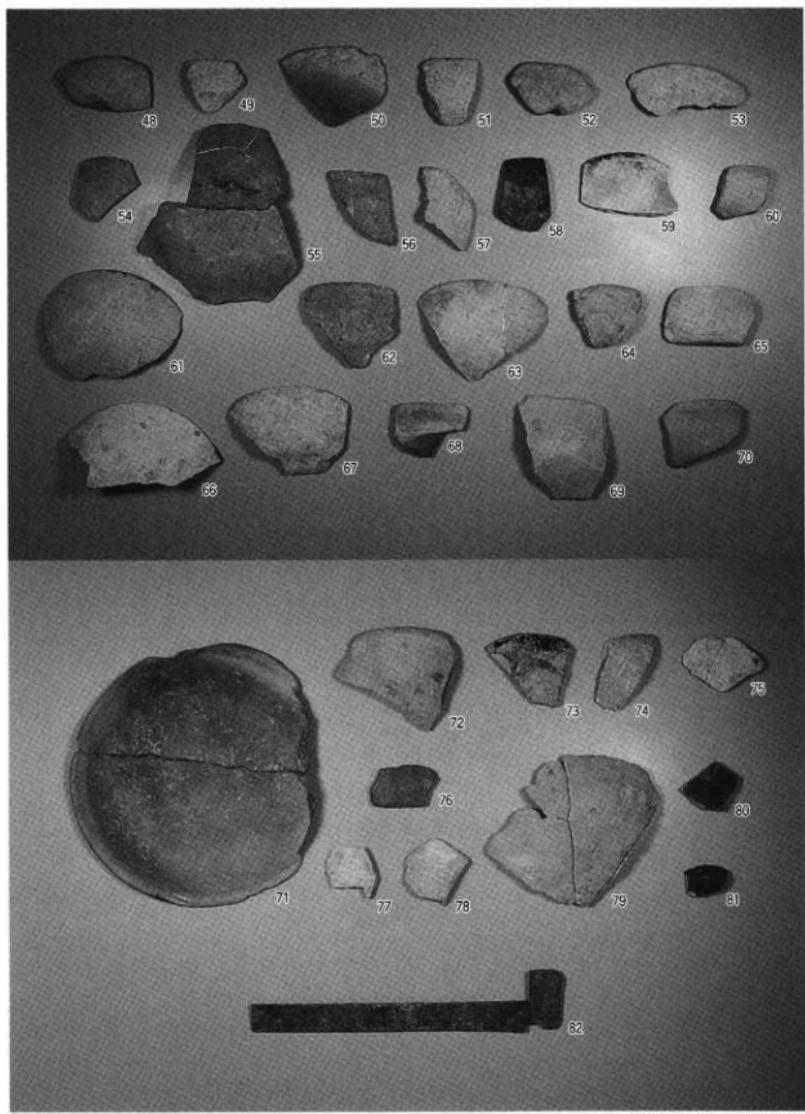


写真図版 4

1. P1・2 東土壙
2. P4 東より
3. P7 東より
4. P3 焼土
5. T4 配石遺構
6. T6 空堀内遺物出土状況
7. T2-A 遺物出土状況



写真図版5 出土遺物1



写真図版 5 出土遺物 2

報告書抄録

ふりがな	ますやまじょうせき						
書名	増山城跡						
シリーズ名	(3)						
編集者名	利波匡裕						
編集機関	砺波市教育委員会						
所在地	〒939-1398 富山県砺波市榮町7-3 TEL(0763)33-1111						
発行機関	砺波市教育委員会						
所在地	〒939-1398 富山県砺波市榮町7-3 TEL(0763)33-1111						
発行年月日	西暦2000年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (対象) m ²	調査原因
増山城跡	富山県砺波市 増山字一の丸 3321 外	208	001	36° 39° 55°	137° 2' 41"	990927～ 991224	対象面積 1,500m ² 発掘面積 350m ² 埋蔵文化財 緊急調査事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
増山城跡	山城	中世	空堀 土塁 柱穴	剥片、縄文土器 須恵器、 中世土師器			

平成12年3月

増山城跡 III

編集 研波市教育委員会
発行 研波市教育委員会
富山県砺波市榮町7-3
印刷 フジチューエツ

